

昭和6年刊の中学用『兵庫縣郷土讀本』から①

孝女ふさ褒状



兵庫県150周年にあたり、教育委員会では「ふるさと副読本」を作成中ですが、県議会の議会図書室には、昭和6年（1931）年発行の『兵庫縣郷土讀本』が所蔵されていました。小野中学（旧制）1年生の生徒氏名が書いてあり、実際に使用されていたものと思われます。

その（19）項に「孝女おふさ」が取り上げられていました。注欄の「研究資料」として、ふさが領主の丹羽氏福から受けた褒状が掲載されていたので紹介します。このブログで紹介してきた『兵庫県地理郷土書』の「孝女ふさ」では、この褒状を一目見せてほしいと多くの人が訪れたと書いてあった、その褒状です。

丹羽侯から受けた褒状左の通り

一金拾両

右者累年對養父母致孝養候趣達御聴為御褒美被下置候者也

戌十一月

孝女ふさへ

御役所

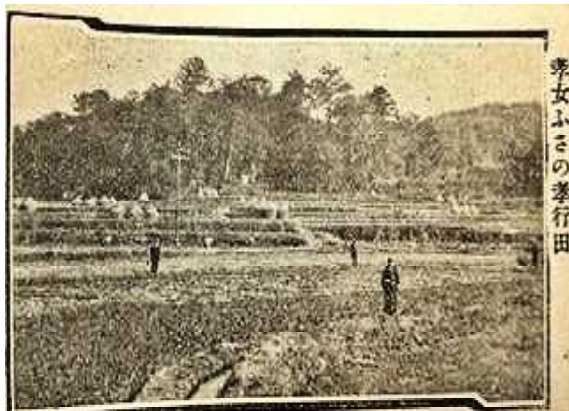
『兵庫縣郷土副読本』（昭和6年刊）に掲載されている「孝女ふさ」の項です。

おふさは加東郡社村の十兵衛の子でした。六歳の時から三草村の茂兵衛の家に育てられまし



たが、茂兵衛が至って貧しい水呑百姓だったので、おふさは七つ八つの遊び盛りにも近所隣りの子守や使い歩きに頼まれて、貰った金品で家の生計を助けました。

十歳の頃には幼心にも年老いた父が草履や草鞋を作るのを見て気の毒に思い、傍に藁を打ってはその手助けをした。又父が山に薪を取りに行つて帰りの遅い時など、大そう心配して迎えに出たことも度々ありました。十一歳の時、他家へ奉公に出ましたが、主人の与えるものは何によらず、総て父母に贈つてこれを慰め、又暇があれば主人の許しを得て養家をたづね、父母の元気な顔を見るのを唯一の楽しみにしていました。



廿五（25）歳の折、大病にかかった父はおふさを臨終の枕もとに呼んで涙をながして言いました。

「家が貧しい為にお前を仕方なしに奉公に出したが、お前は少しも私を怨む様子もないばかりか、

奉公の身で心のままにならぬ中をよく自分等二人の為に尽くしてくれた。今更お礼の言葉もない。だが、物には報いのあるもの、行末は必ず仕合わせになるだろう」

おふさはその後ひとりになった養母をいたわり、何くれとなく親切に世話をしましたが、この事がお上のお耳に達し、役所に呼ばれて褒美をいただきました。

おふさはそのお金で家を改築し、田地を買い求めてこれを子孫に伝えました。その田は今も孝行田として残っています。おふさは嘉永二年九十歳の高齢でなくなりました。

以上が「おふさ」の一節でした。欄外には、孝女ふさの孝行田の写真と孝行田碑（蘇峰徳富猪一郎題額）の碑文が掲載されています。さらに「問」として、「おふさの外（ほか）に修身で学んだ孝子は誰か」と書かれています。本文を読み、欄外の写真や資料をもとに話題を広げ、さらに問いかけまで付けられていました。自分の身近な地域の例や歴史上の孝子について調べたかもしれません。

写真を見ると、今の景色とずいぶん違って、田圃が広がって、その向こうに神社でもあるのか松の大木のある森が写っています。ひょっとしたら、住吉神社の鎮守の森でしょうか。

兵庫県議会議員藤本百男様

◆ 郷土史ブログ「ふるさと加東の歴史再発見」より

